

西トップ遺跡の調査と修復

—北祠堂の再構築—

1 はじめに

2015年末に南祠堂の最終的な再構築作業を終了し、2016年当初から、北祠堂の解体工事に着手した。

北祠堂の解体に関しては下層のレンガ遺構が検出されたことにより、その発掘調査に2016年9月まで時間を要した。その後、レンガ遺構を褐色粗砂で埋め戻し、2016年10月から下成基壇の現位置での仮組を進め、同年11月から再構築を開始した。まず下成基壇の不等沈下を防ぐために、下成基壇の下部に砂岩チップ・版築土・ラテライトによる基礎工事を施した上に下成基壇の再構築をおこなった。再構築にあたっては、砂岩外装石材の内側に設置されていたラテライトは、風化が激しくそのまま使用することが困難と判断し、すべてラテライト新材に置き換えた。また国際調整委員会（ICC）において勧告を受けた、基壇構築時のジオテキスタイルの使用に関しては、南祠堂と同様に下成基壇内面に使用し、版築土で押さえた。下成基壇内部の基壇土はこれまで同様に改良土

を用い、版築によって強度を高めた。

2 下成基壇の再構築（N25～N19）

下成基壇の最下段N25は、再構築に際し基礎として砂岩チップを敷き詰め、改良土を混ぜてたたき締めた後に石材を載せて、不等沈下を防いだ。その後は外部の砂岩石材と内側のラテライト石材を積み内部を改良土で版築して組み上げていった。

3 上成基壇の再構築（N18～N16）

上成基壇は東北隅部の破損が著しく、かつ、1920年代のフランスによるクリーニング作業によって、かなりの石材が移動されており、オリジナル石材を発見するのに困難がともなった。そのためオリジナル石材の発見が困難な箇所は、砂岩新材で補うこととし再構築作業を進めた。

上成基壇も砂岩の基壇外装石材の内側に、1列ないし2列にラテライトを組み込んで構成される。今回外装砂岩は、残っているオリジナル石材は極力使用するように努めたが、内部のラテライトは経年変化による風化が著しく、解体の段階で破損する部材が多かった。そのため、



図14 北祠堂修復完成後（北西から）

今後の不同沈下等を防ぐために、すべてラテライト新材に置き換えた。ラテライト内側には下成基壇同様、改良土を充填した後に版築をおこなった。

N17はほぼ全面をラテライトを中心とする石敷面とする。モールディングを有するN16を安定石材を載せるためと推定される。

4 軀体部の仮組と再構築 (N10～N1)

N10のモールディングのない石材からを軀体部とし、まずコンクリートベース上で仮組をおこなった。北祠堂の軀体部偽扉は、東面のみが開口し、後の3面には釈迦の立像レリーフが刻まれる石材で閉塞される。レリーフは解体前には南面と西面にかろうじて側部のみが原位置をとどめるに過ぎなかった。調査の段階で西面釈迦像の上半部2石は保存事務所に保管されていることが判明しており、文化芸術省やAPSARA等のご理解を得て、現地に戻すことが可能となった。2017年8月31日に保存事務所で法要をおこなった後、現地に移動、仮組に組み込むことができた。北面と南面の如来像も、基壇内の落下石材や周辺の散乱石材の中から部材が発見され、ほぼ旧状に戻すことができた。軀体部に乗る破風に関しても、

西面上成基壇上に破風下部の横材が落下した状態で残っており、これをもとに、各面の破風を修復することができた。ただ屋根材が修復できない現状にあっては、破風のみを乗せることは、来訪者の安全確保の面から困難であると判断された。最終的に軀体部上部は、全体の安定化と釈迦像レリーフの安全と盗難防止もかねて、破風組み上げ写真撮影の後は、破風最下段の桁材のみの状態に戻す予定である。

(杉山 洋)



図15 西面破風仮組状況



図16 破風組み上げ状況（南東から）